

■ 展覧会「もうひとつの京都—モダニズム建築から見えてくるもの—」のご案内

1. 展覧会の主旨と概要

本展覧会は、1920年代から1970年代に建てられた、京都におけるモダニズム建築の軌跡をたどることを通して、モダニズム建築の価値とその持つ意味を顕在化させ、あわせて、長い木造文化の伝統をもつ京都という地域特性との関係性についても再考しようとする試みです。

ここでいうモダニズム建築とは、工業化を前提に、合理主義と社会改革的な思想を背景にして、装飾を排した抽象的な形態と、外観だけではなく空間構成を重視したデザインを志向した近代建築のことを指しています。モダニズムという考え方自体は、20世紀の初頭にヨーロッパを中心に生まれ、その思想にもとづいた建築は、世界的なスケールで展開されました。そこには、科学技術の進歩を前提とする普遍性をもった世界共通の方法を求めようとする共通認識が見られます。

けれども、同時に、建築は、必然的に、気候風土の違いや地域的な特性、伝統とのつながりなどの影響を受けるものです。そのため、モダニズム建築は、実はその当初から、国や地域による違いについても議論されてきました。そして、近年のモダニズム建築の再評価という趨勢の中においては、一枚岩的だと単純に理解されてきた枠組みを相対化し、むしろ、地域や国によって、独自の展開を遂げたことに目を注いで、そうした広がりの中で、改めてモダニズム建築とは何だったのか、を再検証し、そこに流れている思想を現代において再評価しながら、これからの建築や都市を考えるための貴重なヒントとして共有しよう、とする動きが顕著になってきています。

こうした中であって、1200年の歴史を持つ古都・京都は、関東大震災によって過去と断絶し、太平洋戦争の空爆によって焦土と化した東京や大阪とは異なり、ほとんど無傷なまま、長い木造文化の伝統と歴史的な町並みが連続してきた極めて特殊な都市です。本展では、その京都において、モダニズムの思想がいかに受容されたのか、また、京都という場所を建築家たちはどのようにとらえて設計を行ったのか、明治以降の近代化と西欧化の流れの中でモダニズムへの転換はどのように進んだのか、など、これまであまり意識されてこなかった視点で、1920年代から1970年代までのモダニズム建築を概観します。そこに立ち現れて見えてくるのは、伝統と現代をつなぐ貴重な文化の水脈であり、もうひとつの京都の姿です。そして、この作業を通じて、戦前／戦後という従来の枠組みにとらわれることなく、一続きの流れの中でモダニズム建築の持つ価値と意味について広く共有し、それら全体が未来へ向けた貴重な文化遺産であることを確認する機会としたいと思えます。

2. 開催期間 2011年2月7日(月)～5月8日(日)

休館日：日曜・祝日(ただし、4月29日～5月8日は開館)

開館時間：10:00～17:00(入館は16:30まで)

入館料：一般200円、大学生150円、高校生以下無料

3. 開催場所 京都工芸繊維大学 美術工芸資料館

〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町

電話：075-724-7924

4. 展示の構成と内容の概要

- I. 京都のモダニズム建築の夜明け
- II. プロフェッサー・アーキテクトたちの系譜

III. 戦後モダニズム建築の開花と展開

- ・各建築作品の設計原図、スケッチなどの図面資料
- ・現況を伝える撮り下しの写真（本学助教の市川靖史が担当）
- ・既存の模型：下記*印の建物
- ・新規制作する模型（学部3回生11名が制作）：下記青字の建物
- ・その他の資料

5. 取り上げる主要な建築作品

- ①岩元 禄 「京都電報電話局」（現「NTT西陣別館」）1921年
- ②本野精吾 「本野精吾自邸」1924年*
- ③吉田鉄郎 「京都市中央電話局新上分局」（現「カーニバル・タイムズ」）1924年
- ④森田慶一 「京都大学農学部正門及び門衛所」1924年
- ⑤森田慶一 「京都大学楽友会館」1925年
- ⑥吉田鉄郎 「京都市電話局」（現「新風館」）1926年
- ⑦武田五一 「毎日新聞京都支局」（現「1928ビル」）1928年
- ⑧大倉三郎 「京都大学理学部附属花山天文台」1928年
- ⑨藤井厚二 「聴竹居」1928年*
- ⑩本野精吾 「鶴巻邸」（現「栗原邸」）1929年*
- ⑪武田五一 「関西電力京都支店」1937年
- ⑫森田慶一 「湯川秀樹記念館」1952年
- ⑬村野藤吾 「都ホテル佳水園」（現「ウエスティン都ホテル京都・佳水園」）1954年*
- ⑭前川國男 「京都会館」1960年*
- ⑮吉村順三 「同志社大学アーモスト館ゲストハウス」1963年
- ⑯山田 守 「京都タワー」1964年
- ⑰大谷幸夫 「国立京都国際会館」1966年*
- ⑱ジョージ・ナカシマ 「桂カトリック教会」1967年*
- ⑲吉村順三 「ホテル・フジタ京都」1970年
- ⑳増田友也 「京都大学総合体育館」1972年
- ㉑ 鬼頭 梓 「同志社女子大学図書情報センター」1977年
- ㉒ 菊竹清訓 「京都信用金庫各支店群」1970～83年

6. 図録構成

A：論稿

- ①「京都という町とモダニズムの受容について」中川 理
- ②「戦前における京都のモダニズム建築運動」笠原一人
- ③「プロフェッサー・アーキテクトたちの系譜」石田潤一郎
- ④「逡巡建築の遺産」観音克平（元・郵政省営繕部）
- ⑤「山田守と京都タワー」大宮司勝弘（東京家政学院大学助手）
- ⑥「森田慶一の建築と思想」田路貴浩（京都大学准教授）
- ⑦「増田友也の建築思想」前田忠直（京都大学名誉教授）
- ⑧「増田友也の建築と思想」朽木順綱（京都大学助教）
- ⑨「京都におけるモダニズム建築のかたち」松隈 洋
- ⑩「モダニズム建築の保存・再生と京都」玉田浩之

B：関係者の証言インタビュー

- ①「京都で建築をつくるということ」
 - ・榎文彦（建築家、「京都国立近代美術館」設計者）
 - ・内藤廣（建築家、「虎屋京都店」設計者）
 - ・菊竹清訓（建築家、「京都信用金庫」設計者）
- ②「京都の近代建築を守る」若林広幸（建築家、「旧・毎日新聞京都支局」を購入し再生）
- ③「建築家・増田友也の建築と思想について」前田忠直

C：その他

- ・失われた京都のモダニズム建築
- ・資料編：関連年表・建築家の略歴などを巻末に掲載。

7. 組織、運営体制について

A：企画委員会	松隈 洋（総括）	京都工芸繊維大学	美術工芸資料館	教授
	石田潤一郎	同	造形科学専攻	大学院 教授
	中川 理	同		大学院 教授
	大田省一	同		特任 准教授
	玉田浩之	同		特任 助教

B：撮り下し写真撮影	市川靖史	同	デザイン科学専攻	大学院 助教
(2010年4月～12月にかけて撮影)				

*シンポジウム：モダニズム建築と京都をめぐる

2011年4月9日（土）14：00～17：00 : 確定

会場：京都工芸繊維大学60周年記念館
無料 当日先着順（定員200名）

パネリスト：内藤 廣・前田忠直・石田潤一郎
司会：松隈 洋